

黙示録の記録

序章 未来をひもとく書

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神 正海

黙示録の記録

目次

序章 未来をひもとく書

第1章 栄光のうちにある人

第2章 しみやしわやそのようなもの

第3章 誘惑の時

第4章 御座の周り

序章 未来をひもとく書

黙示録の目的

聖書の最後の書・黙示録は、何世紀にもわたって多くの人々の興味を引き、また、魅了してきました。より多くの注解書が書かれ、聖書の正典の中のどの書よりも、さまざまな解釈がなされてきました。

このように人々を夢中にさせる面白さの理由は、私たちが時間に縛られており、歳月の流れを考えると、私たちが、将来何が起こるのかを知りたいと思っているためです。私たちは金持ちになるのでしょうか、それとも貧乏になるのでしょうか。私たちの家庭生活は幸せで豊かになるのでしょうか、それとも争いと敗北に打ちひしがれた日々を送るようになるのでしょうか。みな戦争によって失われてしまうのでしょうか、それとも、未来は平和と繁栄で満ちているのでしょうか。

そして、さらに重要なことは、死に際して起こる出来事です。ヒューマニストが主張するように、死はすべての終わりなのでしょうか。それとも、永遠の豊かな人生の、または永遠の裁きの人生の始まりなのでしょうか。もし、死後に生があるなら、それはどのようなもので、私たちはその準備のために何をすべきなのでしょう。人間存在の意義と目的は何でしょうか。

このような問題に対する考察と独りよがりの答えは、その種類も数もおびただしく、だれが正しいのでしょうか。近未来に関しては、多くの有能な人々、そしてよく訓練された人々（例えば、天気予報官、市場分析者、政治の専門家など）が、未来を予言することによって、良い生計を立てています。このような予測者は、健全な科学的統計学的技術に基礎を置いています。実は、短期間の科学的統計学的技術に基づいて部分的に成功しているだけです。

これらに加えて、私たちの生きているいわゆる「科学の時代」の最も驚くべき現象の一つは、神秘主義者のような、超自然主義者のふりをした宗教とその儀式の急成長で、彼らの人の心を引きつける力は彼らの預言したり、未来をコントロールする能力があると思われていることにあります。占星術者、占い師、霊媒師や他の近代の「予言者（真意を告げる人）」の激増は、現在の環境に対する行き渡った不満と、世界中の一般大衆がなんとかして未来を知りたいという欲求の直接の結果なのです。「科学」と「ヒューマニズム（人間至上主義）」が失敗していると感じ取り、人々は自らの信仰を疑似科学や超ヒューマニズムに転向させ、なお、将来に対する意味ある答えを必死に探し求めているのです。

しかし、これらの偽りの予言者たちは、今もそれほど信頼されてはいません。この事実を説明するために、一九七九年の始めにアメリカの著名な予見者が行なった予言を考えてみて下さい。すなわち、アメリカで最もよく読まれている新聞『The National Enquirer』は、年の始めに当たり彼らがしたその年に関する予言を発表しています。しかし、後から考え意義深いことには、その年の終わりにそれらの的中率を決して発表しないことです。

実際、超自然的に靈感された予言者という代わりに、彼らは超自然的に靈感を受けていない預言者とすべきなのです。彼らの的中率は非常に低いので、でまかせに推測した方がよいとさえ思えるほどです。『The National Enquirer』によって取材訪問を受けた最も有名な霊媒師十名によってなされた、約九十の予言が出版されました。私の確認できた範囲では、これらの予言のうち、一九七九年内に（一九八〇年でさえも）、彼らが予想した通りに成就した予言は一つもなかったのです。

ただ、一つの予言だけ部分的に成就しました。すなわち、それは、「テッド・ケネディが大統領に当選する」というほとんどの人が予測していた予言です。しかし、同じ予言でジョン・コナリーが副大統領になると言ったのです。しかし、同じ予言で、他の人は、テッド・ケネディが輪廻転生に対する彼の信仰を発表すると言っている、また他の人は、アンジー・ディッキンソンが、ジョン・F・ケネディーとの不倫関係を告白するとも言っていたのです。実現しなかった最も目に余る予言は、「インフレはたちどころに急に止む」というものでした。それに加えて、科学者たちは、癌、虫歯、心臓病、糖尿病、腎臓病、関節炎、風邪、老化過程そのものを治す驚くべき発見を公表するというものでした。他の実現しなかった悪名高い予言は、次の通りです。

カーター大統領ハンググライダー事故で負傷

デビー・ボーン成人映画に出演

ファビュラス石油東テキサスで油田を発見／
 ヨハネ・パウロ二世女性司祭を任命する計画を発表／
 エスキモーの少女ミスワールドに選出／食料の価格は劇的に下落／
 ZFO（ナシヨナル・フットボール・リーグ）に女性審判員登場／
 スピロ・アグニュー男優賞を受賞／フォード自動車納税を拒否し国外脱出／
 ロナルド・レーガン離婚／
 破壊的な恐ろしい地震でカリフォルニア海岸の地形が変化／
 アイディ・エイミン暗殺／
 宇宙観測用ロケットロヴェーナスが新しい惑星を発見／
 ジャッキー・オナシス、アフリカの大使に任命／
 ウォルター・クロンカイト南太平洋のアメリカ外交官に任命／
 本当の聖なる覆い布エジプトで発見／
 モハメッド・アリ議員に当選／
 最初のクローン人間赤毛の少年、ケンタッキーで誕生

そして、引き続き、超能力者で一九七九年の主な出来事を予言した者はだれもいません。イラン危機、キューバへのソ連進攻、シカゴの悲惨なDC-10飛行機事故、ニカラグア革命、カンボジアでの大虐殺の悲劇、ベトナムのボートピープル（難民）、または、一九七九年に実際に起こったほかの出来事などです。『The

National Enquirer』誌の一九八〇年の予言も、結果は失敗で、似たような記録を残しています。しかし、驚くべきことは、非常に多くの一般大衆が、このように悪名高い信用できない偽予言に何らかの興味を示し続けているのです。

多くのクリスチャンでさえ、このような超能力者に過度に影響を受け、彼らの超能力的能力を悪霊の力に帰しています。しかしながら、もし彼らが本当に超自然的だとしても、彼らが何かに導かれているとしたら、たとえそれが悪霊だとしても、彼らの的中率はもつと良いはずですよ。

天使も悪霊も実際に全知ではありません。したがって、彼らが未来について知り得ることは、ほとんど人間と同じくらいです。事実、男も女も計画と実行を通して、ある程度未来に影響を与えることができます。また、分析と推論を通して、ある程度未来を予測できます。彼らのすぐれた力と知識、さらに他の目に見えない霊と、このような知識と能力を共有する彼らの能力によって、確かに、天使や悪霊は人間よりも未来を予知し、影響を与えることができます。

しかし、創造主だけが全能であり、同時にどこにでもおられ、全知なのです。時間を創造されたので、創造主は時間の制約の外にあり、したがって全時代のどこで起こる出来事でも知り、支配します。創造主は、折にふれて、天使や選ばれた人にくらかの知識を分け与えるかも知れません。私たちが未来を知ることができるのは、この範囲で、この範囲内だけで、私たちは本当に未来を知ることができます。そして、このことは私たちが黙示録の目的に導きます。

創造主の書かれたことば・聖書の素晴らしい組み立ての頂点は、未来に関する知識を提供するために特別に書かれました。このことを、黙示録の最初のことば・一章一節で明らかにしています。

「イエス・キリストの黙示。これは、すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため、神（創造主）がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。」〔黙示録一章一節〕

創造主は、未来について私たちのために知らせたいことをこの書に書いています。黙示録が取り扱っている範囲は、近未来の出来事（すなわち黙示録を最初に読む人々、紀元百年頃のクリスチャンにとつての出来事）から、キリストの再臨を通して、ご自身が創造される新天新地に永遠の御国を確立するまでのことです。

私たちはこれらの預言が成就しないのではと気遣う必要はありません。過去と現在活躍した偽預言者とは異なつて、創造主の預言は確かです。

「また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。……それに目を留めているとよいのです。……なぜなら、預言は決して人間の意志によつてもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神（創造主）からのことばを語つたのだからです。」〔IIペテロの手紙一章19節～21節〕

もし私たちが、黙示録にあるこれらの驚くべき預言が実際に起こるかどうかをあれこれと思ひめぐらすべきだとするならば、私たちは、聖霊に動かされた昔の聖書にある預言者たちによつて編集された記録だけを注意深く調べるだけでよいのです。これらの何百という聖書の預言が、文字通りに、そして詳細にわたつて成就してきたことは、非常によく知られている事実で、ほとんど証明する必要はありません〔^①脚注。これらは一般に、長い期間にわたる預言であり、遠い将来に成就するように計画されてきました。その将来の出来事とは、人間や天使が知性を用いての分析、または推論や憶測によつても引き出せないものです。さらに、こ

の種の預言は聖書特有のもので、コーランや論語、その他の宗教書、哲学書には見当たらないものです。これらのものは、ノストラダムスやエドガー・ケイシー、ジョセフ・スミスのような現代の自称予言者の書にも、見当たりません。（脚注―このような証拠事例を見たい方は、拙著『Many Infallible Proofs』（サンデイエト、Creation-Life Publishers 一九七四年出版）、一八一頁から一九九頁を参照してみてください。この書には、成就した主な預言のまとめ、より詳しく論述した参考図書目録があります。）

それゆえに、聖書の預言は、まじりけがなく、聖霊によつて導かれ、確実に成就するものです。啓示の書（黙示録）は、創造主の最後の、決定的な未来についての創造主ご自身による預言の集積であり、まだ成就していない旧約、新約の預言のすべてを統合し、それを解き明かしています。したがつて、これはすべてのクリスチャンにとつて研究し習得すべき特に重要な書なのです。これは、時間を超越した創造主によつて、時に先立つて書かれた歴史上実在した人々に関わる実際の出来事の書です。したがつて、今まで生きた、また、これから生きるすべての人が、少なくとも、それらの出来事のいくつかにかかわるはずであり、それらの出来事は、キリストの復活以来最も重要な出来事であり、私たちがそれらを理解し、それに対して備えることは生命を保つために必要なのです。

しかしながら、悲しむべきことに、黙示録は、困惑させる書でした。そして、ほとんどの読者にとつて、クリスチャンにとつてさえ、理解できない書だったのでした。

啓示の書（「おおいをはずす」）は、不確かな書物（「かくされたもの」となりました。そうあるべきではありません。この書は、これから起ころうとしていることを示すために書かれたのであつて、象徴的なあいまいな言い回しで途方にくれさせ、覆い隠すためではありません。すばらしい祝福が、この預言の書のこと

ばを読む人（聞く人にさえも）すべてに約束されているのです〔黙示録1章3節〕。しかし、一体だれが理解もできないことばで祝福されるのでしょうか。

これは、矛盾です。この書は未来の覆いを取り除くものとして書かれた一冊の書物なのにこんなにも多くの異なる注解があり、果てしない多くの異なる解釈が出版され、真の知識を求めるほとんどの人々をみな混乱状態に置き去りにしていることは矛盾しているように思われます。このようなことは、確かに、この書の原著者ヨハネが意図したことではなかったし、それをヨハネに与えたイエス・キリストの目的でも、それをキリストに与えた父なる創造主の目的でもありません。

書き記された創造主のみことばの土台（礎石）が創世記であつたように、黙示録はその頂点（頂石）です。すべての構成はその基礎である土台の上に建てられなければならないし、その要石ともいふべき頂石によってその完全な仕上げが表示されなければなりません。聖書はすべて創造主の靈感によるもので人にとつて有益です〔IIテモテへの手紙3章16、17節〕。もし人がどれかを選ばなければならない場合には、創世記と黙示録の二つの書で、この二つの書はすべての中で絶対必要なものです。創造主の真理に立ちあはだかる大いなる敵サタンが、その最も激しい攻撃を創世記と黙示録に向けているのは、大して不思議ではありません。サタンは創造も完成もなく、始まりも終わりもない、私たちが敢えて持ち得るものがあるとするれば、すべては存在している現在だけで、創世記の史実性と黙示録の明晰さを否定しようとしています。そして、不幸にも、この考えは現代の世界中のほとんどの宗教の強調点となつていっています。

人々が、今日差し迫つて必要としていっていることは、この世に対する創造主の創造と救いの目的に関する将来の真の見通しを取り戻すことです。彼らは、歴史と預言の、時間と永遠の、意味と目的の真の認識力が必要なのです。しかし、「いない、いない、バァ」のように、彼らはその知恵をどこで見いだせるのかを知らないのです。創世記は、地球の最初の時代の真の出来事を記録し、黙示録は同じようにこれから来る時代の真の出来事を記述しているのです。こうして、黙示録の目的は、自分が置かれている状況に対して正確な方向付けをするためと、やがて地球上に起こるこれらの出来事に対してしっかりした備えをするためなのです。

創世記との関係

聖書の最初と最後の書には切り離すことのできない関係があることを、前の区分ですでに述べました。ある意味でこの注解書は、本質的に筆者の創世記の注解の続編です〔脚注〕。創世記と黙示録両者の突破口は、これらの聖書のカギとなる二つの書物の科学的な正確さ、真の史実性、明晰さを強調することにあります。「Genesis（創世）」は、ヘブル語のトーレドース（発生）の70人訳ギリシャ語聖書に由来したことばで、「始まり」を意味します。「Revelation（黙示）」はギリシャ語のアポカルプシスに由来しており、文字通りには「以前隠されていたもの」「おおいをはずす」という意味です。このように創世記は「世の始まりの書」であり、黙示録は「世界の未来の覆いをはずす書」です。聖書の大きなテーマは、通常、創世記に始まり、聖書全体を通して徐々に進展し、最後に黙示録で、最高潮の完成に至るのです。

（脚注②）『創世記の記録』 Genesis Record (Grand Rapids: Baker Book House, 一九七六年、七二六頁)

創世記1章には、罪のない世界の記述があります。その世界は、人のために造られ、人の支配下に置かれ

ました。たとえ、罪と呪いがしばらく侵入したとしても、創造主はご自身の目的をだめにされる事はありません。創造主が初めに意図されたすべては最終的に成し遂げられます。地球は原初の完全な状態に回復され、それから永遠に続かなければなりません。罪と呪いは取り除かれなければならず、死はもはやなくなるのです。創世記の最初の三つの章は、創造主の完全な創造に罪が入り込んだ概要を述べています。黙示録の最後の三つの章は、創造主が贖われた被造物世界から罪を浄化する概要が述べられています。

次の興味深い有益な比較に目を留めてください。それは創世記に描かれている見習い期間（そして、その後呪われた）の世界と、黙示録に詳述されている永遠の世界（贖われたゆえに）との間にある比較です。

■見習い期間の世界（創世記）

光と闇との区別（1章4節）
 陸と海との区別（1章10節）
 太陽と月の支配（1章16節）
 最初の天と地は完成された（2章1～3節）
 備えられた園に住む人（2章8、9節）
 エデンから流れ出ている川（2章10節）
 園の中央にあるいのちの木（2章9節）
 その地にある金（2章12節）
 ブドラフとしまめのう（2章12節）

□永遠の世界（黙示録）

そこには夜がない（21章25節）
 海もない（21章1節）
 太陽も月もない（21章23節）
 永遠に続く新しい天と新しい地（21章1節）
 備えられた都に住む人（21章2節）
 創造主の御座から流れ出る川（22章1節）
 都のいたる所にあるいのちの木（22章2節）
 都にある金（21章21節）
 あらゆる宝石（21章19節）

園を歩かれる創造主（3章8節）
 力を与える聖霊（1章2節）
 夫からつくられた花嫁（2章21～23節）
 増えよとの命令（1章28節）
 いつわり者のたやすく近づける国（3章1～5節）
 創造主のかたちである人（1節27節）
 見習中にある人（2章17節）

創造主の幕屋が人とともにある（21章3節）
 招いておられる聖霊（22章17節）
 夫のために飾られた花嫁（21章2節）
 救われた人々の国（21章24節）
 いつわり者にとぎされた都（21章27節）
 創造主が共におられる人（21章3節）
 相続する人（21章7節）

■のろわれた世界（創世記）

土地は呪われた（3章17節）
 日々悲しむ苦難（3章17節）
 顔に汗（3章19節）
 イバラとアザミ（3章18節）
 野の草を食べる（3章18節）
 土に帰る（3章19節）
 皮のころも（3章21節）
 サタンの敵対（3章15節）
 いのちの木から遠ざけられる（3章24節）

□贖われた世界（黙示録）

もはやのろわれるものはない（22章3節）
 もはや悲しみはない（21章4節）
 もはや涙はない（21章4節）
 もはや痛みはない（21章4節）
 12種の実（22章2節）
 もはや死はない（21章4節）
 真つ白いきよい麻布（19章14節）
 サタンの追放（20章10節）
 いのちの木へ近づく（22章14節）

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 園から追放 (3章23節) | 都へ入る自由 (22章14節) |
| 約束された贖い主 (3章15節) | 完成された贖い (5章9～10節) |
| いつも悪いことをする人 (6章5節) | 汚れた者はいない (21章27節) |
| 女の子孫 (3章15節) | ダビデの根また子孫 (22章16節) |
| 守っているケルビム (3章24節) | 御使いは招いている (21章9節) |

他の同じような比較が、創世記と黙示録に示されている二つの世界の間に線を引く事が出来ます。このような比較や顕著な相違点に加えて、創世記で始まった多くの特別な課題が黙示録で詳しく述べられているか、さもなければ、特別な勧告に関連して簡単に述べられています。

例えば、世界の最初の創造が、黙示録に少なくとも四回 (4章11節、10章6節、13章8節、14章7節) 特に述べられています。黙示録14章7節には、ノアの洪水 (「水の源」) が、そして黙示録10章1節にはノアとの虹の契約が、それはなしに言及されています。二人の証人 (黙示録11章3～12節) の名前は判定できませんが、一人はノアの洪水以前の族長エノクである可能性が大了。

ヘビの子孫と女の子孫との間の長年の争いは、創世記3章15節に最初に告知されていますが、黙示録12章1節から17節の大部分でさらに詳しく説明されています。エデンのあの年を経たヘビは、ここで全世界を惑わすサタン (黙示録12章9節) と同じであることが明らかにされています。

ニムロデの下、バベルで始まった洪水後の反逆は、歴史を通して発展し綿密に検討されてきました。そうして黙示録の17章、18章の大きいなる都市バビロンで、来るべき反キリストの下で頂点に達します。黙示録1章8節にソドムの邪悪さに関して、また、黙示録14章10節に火と硫黄に関する記録があります。

七つの教会に対する手紙の中で、黙示録2章7節に、パラダイスにあるいのちの木について言及され、同じように黙示録3章14節には「神 (創造主) に造られたものの根源」に関して言及されています。創世記3章24節のケルビムは、おそらく黙示録4章6節から8節及び聖書のいろいろな所で述べられている生き物でしょう。

黙示録5章5節では、キリストは「ユダ族から出た獅子」と呼ばれており、創世記49章9節のヤコブの預言に関係があります。同じ預言での血で洗う衣についての言及が、黙示録1章5節と7章4節で取り上げられているように思われます。この預言で名を挙げられているイスラエルの子どもの名のすべてが、ダンを除いて、黙示録7章4節から8節に再び挙げられています。

創世記だけでなく、旧約聖書の他の多くの書が、黙示録に引き合いに出されています。旧約聖書の、特に預言者イザヤとダニエルの考えと用語が黙示録に浸透しています。ある学者は、黙示録の三分の二以上の節が旧約聖書からの引用か間接的な言及 (しかし、はっきりした引用ではない) であると評価しています。黙示録の著者、使徒ヨハネが、明らかに前提としていた事は、読者がすでに聖書の他の書に親しんでいるという事で、こうして、創造主が聖書を完結された時、読者は最後の頂点として書かれた創造主の啓示を受け入れて理解する用意が出来ていたのです。

創造主のことばは「とこしえから、天において定まって」 (詩篇一九篇89節) いるのです。けれども、「昔から、聖なる預言者たちの口を通して」 (使徒の働き3章21節)、創造主は天から地上の人間に少しずつ創造主のことばを伝えてきました。明らかに「アダムの歴史の記録」 (創世記5章1節) でアダムから始め、モーセ、ダビデ、その

他の人々を通して、「神（創造主）はむかし先祖たちに預言者たちを通して、多くの部分に分けて、また、いろいろな方法で語られ」（「ヘブル人への手紙」第一章一節）たのです。それから、キリストが来られた。そして創造主の新しい契約のことばが、ペテロやパウロや、その他の人々を通して、羊皮紙やパピルスに記されたのです。

キリストがこの世に来られて百年経って、ついに最後まで生き残っていた愛された使徒ヨハネが、もう一度、そして永遠に書かれたみことばを確証するために選ばれました。長い間天に置かれていた聖書の残りのすべてが、この世にもたらされたのです。啓示の書（黙示録）は写し取られ、創造主のことばは完結したのです。

黙示録の解釈

啓示の書である黙示録の主な課題は、常にそれをどのように解釈するかという問題でした。黙示録の解釈はとても多く、しかも多様なので、多くの熱心なクリスチャンたちは、この書を理解することは単に不可能だと結論しているのです。こうして、彼らは、この書を読み、理解する者に約束された大きな祝福を捉えそこなっているのです。

すでに非常に多くの異なる解釈が生み出されている本に、専門の神学者でない者が、他の解説を試みるのは生意気に思われるかも知れません。私は、私の科学上の経歴が必要な洞察力を確かに提供できることと期待しています。もし、この注解書で何かまったく新しいものがあるとすれば、聖書研究に対する文字通りのアプローチであり、解釈しないのが最良の解釈と仮定している事にあるのです。すなわち、ヨハネや他の聖書記者は、他の多くの著者と同様に、読者に伝えたいと願って書いていたと推測されます。ですから、彼ら

は平易に書いたのです。言いたいことと彼らが信じている事を正確に言うことが、読者であるすべての世代の人々に、明確かつ簡潔な真理を伝えるのに最も効果的ではありません。

もちろん、彼らは同時代の人々のために書きましたが、彼らは、靈感された創造主のことばを書いていること、また、彼らのことばはやがて読まれ理解される事、それから、すべての時代のすべての国の人々によって、信じられ、守られ、理解される、正確に言うこと、少なくとも、もし彼らがこのことを理解していなかったとしても、彼らの書を靈感された聖霊は理解していたし、創造主は、ご自身の民に知ってもらいたい切に望んでいる大いなる真理・靈感されたことばが実際に伝達されるように配慮したはずのです。

黙示録はどうしても文字通りに解説すべきだと主張しているのは私一人ではありません。それが、恐らく最も事実に忠実であり得るのです。なぜなら、直訳主義者や聖書の預言の実現を信じる未来主義信者の解説者でさえ、彼らの解説全体のところどころに、あいまいな象徴的かつ比喩的な解釈をしているように思われるからです。実際に、人が解釈（すなわち、これは何々を意味するという解釈）しないのですから、「文字通りの解釈」ということばは用語上矛盾しています。もし述べられている事を、その言葉を細部にわたって意味している通りにただ受け入れるのだとするならば、なおさら矛盾しています。さらに「より文字通り」とか「最も文字通り」という用語は余分なのです。文字通りは文字通りです。

この注解書にある説明は、徹頭徹尾次のことを前提にしています。すなわち、著者（直接はヨハネで、最終的には聖霊）は、まず第一に、読者に明確な真理を伝えるために、注意深く全神経を集中させた事です。もちろん、このことは象徴や例話が伝達する目的をより効果的に果たせるとき、それらの使用を妨げるものではありません。しかし、これらの例話の解釈は読者の想像力や創意に任せられているではありません。

それらは直接の前後関係または読者がすでに精通しているはずだとヨハネが推定した、聖書の歴史書や預言書のより幅広い前後関係のどちらかに基づいて、はっきりと定義され説明されなければなりません。

黙示録の解釈に対するこのアプローチは、黙示録を理解する上で困難な大部分を取り除くことが分かります。しかし、ある人が言っているように「黙示録は理解するのは難しくないが、信じるのは難しい」。非常に多くの人が比喩的な解釈に助けを求めている主な理由は、彼らがその預言を文字通りの意味で科学的、美学的に受け入れるのが困難だと知った事と、黙示録に対する不快感をいくらかでも和らげようとしていることにあるのです。しかし、このように解釈するようにとの指針を、文脈上どこにも見出せません。したがってこの戦略は、まさに、黙示録の注解書の間にある相違の寄せ集めになります。そして、このことは、私たちがこの注解書で明らかに避けようとしていることです。

同時に、主と主のことは愛した誠実で創造主を敬う人々によって書かれた多くの「霊的な」解説書には大いに価値ある多くの資料が確かにあります。一方、聖書のどの節もただ一つの解説、すなわち最終的に聖霊が意図されたただ一つの説明があるだけで、その解説は、他の多くの説明や適用に、または、たぶん有益な類推や幅の広い原則に導くかもしれません。これがヨハネの黙示録の解説にこのように多くの選択すべき(時には、まったく空想的な)解説をもたらした要因と思われるます。

それゆえ、この解説書が、たとえその根本的説明で他のアプローチに従わないとしても、多くの価値ある洞察が他のアプローチでも得られることを認めているのです。創造主のご性質と根本方針は決して変わりません。したがって、使徒時代の人々に対する創造主の取り扱い、歴史時代を通しての人々に対する取り扱い、そして、預言されている未来の人々に対する取り扱いの間に、多くの類似点を私たちは、見ることができ

のです。

黙示録を解釈するに当たって用いられてきたいろいろな根本的分類をまとめると次の通りです。

1、過去主義者の見解

この立場の人は、黙示録が書かれた時代にあった初代教会の問題と、特にその迫害に当てはめるものとして黙示録を考えます。黙示録にある多くの象徴的表現は、ローマ帝国の下で試練を受けていた教会を勇気づけるための工夫を表わし、信者でない人はだれもこの本を理解できないように故意に計画された。

2、歴史の見解

この立場をとる人々は、黙示録に象徴的に記されている出来事は、この書が書かれた時からキリストが来られ永遠の御国を確立するまでの年代順に起こる一連の歴史的出来事を表わすとしています。その多く、特にバビロンと「獣」を取り扱った部分は、ローマ・カトリック教会と教皇とを結び付け、他の象徴はイスラームの出現や、ナポレオン戦争のような出来事と結びつけられているのです。

3、未来主義者の見解

この立場の人々は細部でいろいろと異なっています。しかし、未来主義者の解釈は、一般に4章から22章までの黙示録のすべてを教会時代の終わりの出来事、すなわちなお未来の出来事を記録していると見做します。多くの未来主義者は、さらに多くのことを象徴的に取っているが、他の人々は、これら将来の出来事の大部分を文字通りの意味で取っています。

4、回帰主義者の見解

この立場の人々は、前述の過去、現在、未来学派の年代的解釈を結び合わせようとする。彼らは、類似した預言が続いて起こる事（封印、トランペット、鉢）に注目し、各々の預言は初代教会で始まり、歴史を通して発展し、来るべき御国で頂点に達するとする。

5、理想主義者の見解

理想主義的、神秘主義的注解者の人々は、黙示録に記されている出来事を過去、現在、未来のどの歴史上の出来事ともまったく関連づけようとしません。むしろ、これらの出来事すべては、困難の中にある信者の善が悪に、キリストがサタンに最終的に勝利することを信じて励ましを受けるように計画された一連のたとえ、または比喩として取り扱っているとする。

過去主義者と理想主義者の見解は、黙示録にある預言的ことばを預言と見なさないもので、彼らは、今日、主に自由主義の、また新正統派の注解者によって支持される傾向があります。彼らにとって、黙示録は社会的的前進と、より安定した世界秩序の究極的勝利を信じる信仰の声明に過ぎないのです。

歴史的解説者と回帰主義者の見解は、数世紀にわたりプロテスタントの思想界で優位を占めてきました。彼らは、黙示録をローマ・カトリックに対する剣として用いており、ローマ・カトリックを大いなるバビロンで象徴されると判断したのです。事実、最初の過去主義の解説者は、おそらくカトリックの体系に対する反発として、カトリック教会の中で生じたことでしょう。

しかし、歴史的解釈の厄介な問題は、出来事と預言の関係があまりにもあいまいなことです。確かに預言されたと思われる歴史上の出来事の象徴のどれ一つも、かつて、これらの出来事を予想するのに用いられはしなかったのです。振り返ってみてさえ、預言と出来事の関係は非常にぼんやりしてあいまいなので、歴史的解釈者間でどの二人をとつても意見の一致を見ることは殆どありません。バビロンに関してさえ、プロテスタントはバビロンをローマ・カトリックと考え、他方、バビロンはプロテスタントを指すとカトリックが解釈するかも知れません。

黙示録を文字通りに解説する者は、もともと、未来主義者であることは避けられません。なぜなら、黙示録4章から22章の出来事はどれ一つとっても、文字通りに起こったものは実際にまだ一つもないからです。黙示録の預言が将来実現すると信ずる多くの未来主義者は、いろいろな出来事が相次いで記された通りに繰り返し起こり、進展していくと考えます。おそらく、私を含めて最も多くの人々が、厳密な年代順のアプローチを受け入れて従います。この立場は、その出来事に伴って、実際に引き続いて起こる期間を必要としているように思われます。ただし、時には例外があり、それは、たまたま、本文が、過去の特別な預言の始まりにさかのぼって見るように要求している場合です。

また明らかな事は、黙示録の文字通りの解説者は、無千年王国論者でも、千年期後再臨論者でもなく、たいてい千年期前再臨論者です。千年王国は、復活した聖徒と共にキリストが千年間支配する時で、黙示録20章1〜7節におおまかに記されていて、それを文字通りにとると、将来一度だけの出来事です。無千年王国論者は、千年王国を精神的に解釈し、一方、千年期後再臨論者は、それに先立つ復活を精神的に解釈します。

こういうわけで、この注解書は、完全に逐語靈感を信じ、黙示録のすべての節を率直にそのままの意味でとるとの信念に基づいているので、必然的に、未来派と千年期前再臨論者の両方の立場となります。この注解書は他の解釈学派の多くの有益な洞察や暗示を認め、役立つ所はどこにでもそれらを組み込もうと努めて

います。それにもかかわらず、黙示録に記述されている出来事は、真の出来事で、これからの歴史で確かに起こる事です。

それはちようど、創世記と聖書のその他の歴史書にある出来事が過去の歴史で起つたのと同じように、この書の読者はみな、将来起こるこれらの大いなる出来事に、少なくともある程度参与しなければならぬので、それらの出来事を知り、それらに備えなければなりません。この注解書の目的は、やがて来るこれらの出来事が、必ず実現する事とその重要性の真価を人に認めさせるよう助けることです。

黙示録の年代的枠組み

前項ですでに指摘したように、黙示録の文字通りの見方とは、黙示録を真の預言として受け入れることです。黙示録の預言は、それが書かれた西暦百年頃から始まり、新しい地球での永遠に至るまで、年代順にまとめられています。新しい天と新しい地が出現し、永遠の時代が始まる前、現在の地球が続く最後の千年間を千年期と言います〔黙示録20章1〜7節〕。

千年期に入る前に、世界は「獣」と書かれている悪魔のように極悪非道な支配者によって統治されるはずです。獣の下におけるこの全体主義的世界支配の期間は、ちようど「四十二か月」と預言されています。それから彼は打ち負かされて千年期が始まります〔黙示録13章4, 5節, 19章20節〕。その期間の前にもう一つの「一二六〇日」の期間があり、その期間の特徴は「二人の証人」が思うままに預言をし、不思議なわざを行ないます〔黙示録11章3節〕。しかし、獣の世界に及ぼす力を獣が統合する時、この二人の証人が世に及ぼす影響力は、終わり、

「獣」に打ち負かされます〔黙示録11章7節〕。

これらの二つの期間（一二六〇日と四十二か月）は明らかにつながっており、各々三年半に相当し、その一年は十二か月で1か月は30日から成っています。このように地球の歴史には、千年期の直前に最後の七年の期間があるのです。この時期の後半に12章から19章に書かれている出来事が明確に組み込まれています。それに符合して、前半の出来事は4章から11章に大まかに記されています。

二人の証人が預言している日々は、地上に下される災害は、6章から10章に詳しく述べられていて、11章6節にまとめられています。前者は天から見た光景、後者は地上での光景が記されています。4章、5章は地上での七年の特徴ある期間のすぐ前に、天で起こる大いなる光景を記しています。この素晴らしい会衆に、贖われたすべての人が集められ〔黙示録5章8〜13節〕、創造主なる小羊であり、贖い主である主イエスを賛美する歌を歌います。

このような集会は、キリストがご自身の民を天にある彼のみもとに集めるために帰ってこられる時〔ヨハネによる福音書14章2, 3節, イコリント人への手紙15章51〜57節, イテサロニケ人への手紙4章16〜17節〕だけに起こる出来事で、6章から19章に記されている七年間の災いと地上に対するさばきは、贖われた人々を甦らせ、キリストの御許に受け入れるために、キリストが来られた後に起こると明らかに預言されています。後は、ただ紀元百年から聖徒たちの復活に至るまでの時を扱っている2章と3章の解説だけが残っています。これらの章が七つの代表的な教会にあてた手紙から成っているのは的を射たものです。そして、これら教会にとって必要で、問題になる事は、教会時代のすべての教会にとって必要な問題のすべてを包括しているのです。

さらに黙示録に教会時代の後の出来事が追加される理由は、この年代の前後関係の正しさが、時代の進展

とともに、徐々に明らかになることからわかります。黙示録の総括と枠組みは次のようになります。

1 章～3 章	教会時代	期間は不明
4 章～19 章	さばきの期間	七年
20 章	王国時代	千年間
21 章、22 章	永遠の時代	果てしなき年月

黙示録の年代の前後関係は、こうして、これから起こる将来のすべての時代が文字通り来るのを楽しみにして待っているのです。しかし、完全な青写真は、過去の年代をも振り返らなければなりません。黙示録と創世記の密接な関係はすでに書き留められており、黙示録に記載されている出来事は、創造から完成に至るまでのすべての時代にわたる完全な年代の前後関係のほんの一部に過ぎません。

この幅の広い年代配列の枠組みで、宇宙には主な五つの時代があり、全被造物に及んだ甚大な激変によって、これらの各々の時代は他の時代と分けられています。これらを図解してすべて説明します。

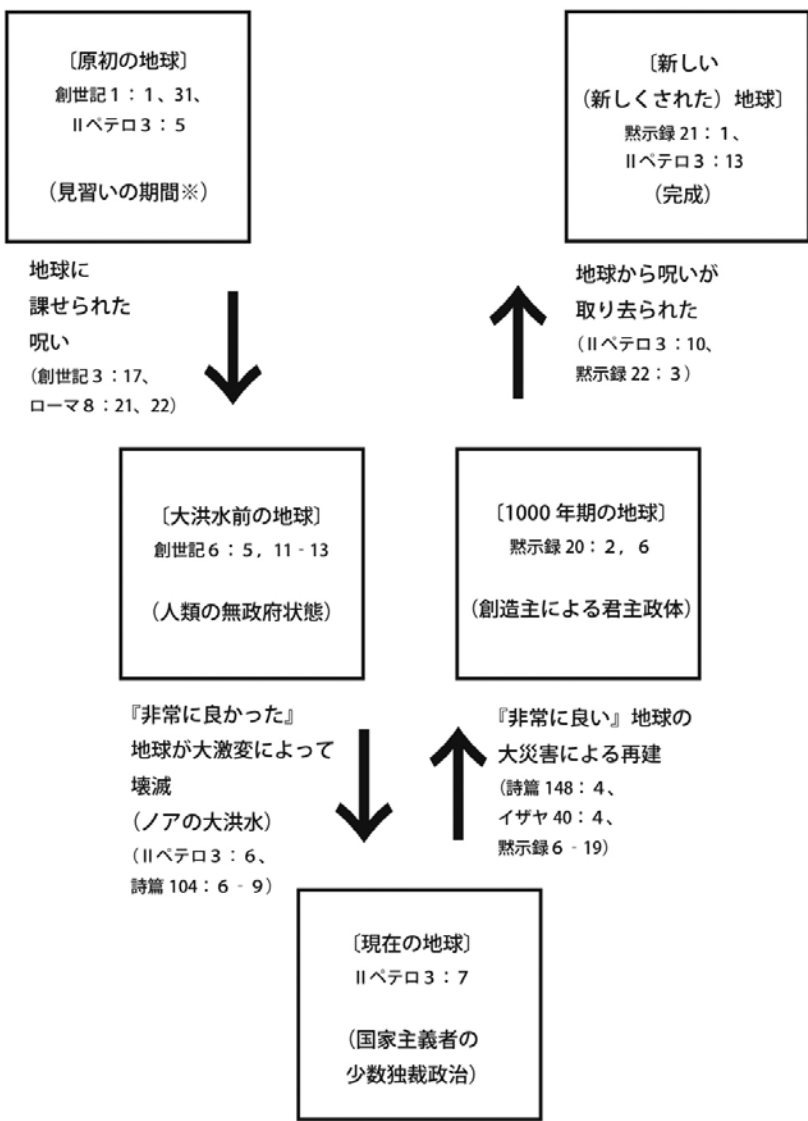
七つの封印

黙示録が他と比べようもない面、すなわち、私たちが特定の節を学び始める前に全体として注意しなければならぬ特徴は、顕著にみられる「七という数字」です。例えば、七で構成される多くの体系のいくつか

が黙示録に見出だされるのを見て下さい。

- 1、七つの教会 (黙示録 1 章 4、11、20 節)
- 2、七つの御霊 (黙示録 1 章 4 節、3 章 1 節、4 章 5 節、5 章 6 節)
- 3、七つの燭台 (黙示録 1 章 12、13、20 節、2 章 1 節)
- 4、七つの星 (黙示録 1 章 16、20 節、2 章 1 節、3 章 1 節)
- 5、七つのともし火 (黙示録 4 章 5 節)
- 6、七つの封印 (黙示録 5 章 1 節、5 章 5 節)
- 7、七つの角 (黙示録 5 章 6 節)
- 8、七つの目 (黙示録 5 章 6 節)
- 9、七人の御使い (黙示録 8 章 2、6 節)
- 10、七つのラッパ (黙示録 8 章 2、6 節)
- 11、七つの雷 (黙示録 10 章 3、4 節)
- 12、七千人 (黙示録 11 章 13 節)
- 13、七つの頭 (黙示録 12 章 3 節、13 章 1 節、17 章 3、7、9 節)
- 14、七つの冠 (黙示録 12 章 3 節)
- 15、七人の御使い (黙示録 15 章 1、6、7、8 節、16 章 1 節、17 章 1 節、21 章 9 節)
- 16、七つの災害 (黙示録 15 章 1、6、8 節、21 章 9 節)

〈宇宙の5つの時代〉



※訳注：「保護観察の期間」より「見習い期間」のほうがよいと考える

22、七つの教会へ宛てられた手紙がそれぞれ七つの区分から成る（黙示録2章の注解を見よ）

23、キリストについて七回「私は……である」とある

（黙示録1章8、11、17、18節、21章6節、22章13、16節）

24、天での七つの讃歌（黙示録4章9〜11節、5章8〜13節、7章9〜12節、11章16〜18節、14章2〜3節、15章2〜4節、19章1〜6節）

人が黙示録をより深く学ぶにつれて、この驚くべき書の中に七に関連した多くの部分が同じように見出されます。その点に関し、黙示録で特に目立つ数字が他にもたくさんあります（六六六、一四四〇〇〇、十一の門、四人の騎手、十人の王、千年）。

明らかな疑問は「なぜ？」ということですが。黙示録は、なぜこれほどまでに数字に強調点を置いているのでしょうか。実際に、同じ現象は聖書全体に見られますが、黙示録ほどではありません。おそらく、これはある人が考えるほど驚くことではありません。自然界は数学的なことばで記述可能なように構築されていますし、創造主の靈感されたことばと、創造主が創造された世界とは互いに矛盾しないのです。

事実、聖書にある数的現象は非常に多いので、多くの著者がこの主題に関して広範囲にわたる何巻もの書を書いていきます。不幸にも、彼らが記述している数字の特長を、なんらかの健全な統計学的基礎のようなもので評価している著者はだれもいません。彼らは、これらの特殊な数理的パターンを同定するに当たり、しばしば主観的で独断的であるとさえ思われます。ですから、これらの数字を用いるにあたっては、注意深くよく選んで用いなければなりません。出ている数字は間違いなく真実で意味がありますが、聖書数字学の解

釈と適用に当たって、現在の「学際的技巧」は、あまりにも不十分で、信頼するに足りません。

しかしながら、黙示録の特別な例で、数理的資料は明らかに意図的で意味があります。それゆえ、それを無視することは、この書の多くのメッセージを見落とすことになるはずです。したがって、いろいろな数字とその使用されている理由については、一節一節の学びを進め、それらの数字に出会う時、その都度検討します。

しかし、この書に関する顕著な「七という数」は、まさに始めから特に認めなければなりません。なぜ聖書の最後の書に、このように多くの「七」があるのでしょうか。この問題は黙示録の中では、はっきりと論じられていませんが、主な一つのほぼ確かな理由は、この書が聖書の最後の書だということを強調することにあるのです。事実、黙示録は、創造主の靈感を受けて書かれたことばに対して、さらに何かを付け加えようとする者すべてに対して厳しい警告のことは「黙示録22章18節」を述べて終わっています。

「七」という数字は、常に、完全または完成を表わすものと看做みなされています。これは聖書ばかりでなく、歴史時代のほとんどすべての人々にとっても本当です。七は「縁起のよい」数字であり、「完全」数なのです。完全数として七を強調するのは、私たちが日々生活を整えるために用いている週間カレンダーによっても理解できます。もう一度言いますが、歴史の始めから今まで、最も多くの国家が一週を七日としています。

しかし、この事実は、最初に一週七日制を世界の国々がスタートした理由を説明していないので、この問題の真の答えにはなりません。一週七日には、月や年のように天文学的基礎はないし、また数字の七は、数字10のように生理学的基準で用いている数字でもありません。

人々はこれまで、なぜ七日を一週としてきたのか、また七という数字が、常に完全とか完成を表わしてき

たのかに対する真の説明は、創世記2章3節の創造主の宣言にあります。「神（創造主）はその第七日を祝福して、これを聖別された。神（創造主）がこの日に、そのすべての創造のわざを終わって休まれたからである」〔協会訳〕。黙示録を理解するためには、もう一度、創世記に戻らなければなりません。

創造主は歴史の最初の七日間に全宇宙とそのすべての生き物を無から創造し、組み立て、活力を与えると
いう力強い御業を成就しました。人の罪とその罪ゆえに被造物すべてが呪いのもとに置かれたために、創造主は、それ以降、被造物を贖い、救い出す偉大な御業を実行しつつあります。

ある日、この働きもまた完成するでしょう。しかし、それは七日間よりもはるかに長くかかります。この被造物の贖いと救いの御業の多くは、準備の業でした。創世記で始まる旧約聖書は、この準備の歴史を記しています。そして、新約聖書は救い主の来臨、代価の支払いと選ばれた使徒たちの指導の下、キリストによって贖われた人々からなるあかし人の大集団が設立される過程を詳細に説明しています。

「やがて、神（創造主）につける者が全くあがなわれ、神（創造主）の栄光をほめたたえるに至る」〔エペソ人への手紙1章14節〕大いなる御業も完成されます。そして、創造主の永遠の安息が始まります。黙示録は、使徒時代の最後の時に最後の使徒を通して記され、やがて来るすべての時代に生きるご自身の民の道しるべを提供しています。特に、素晴らしい頂点の出来事に焦点が合わせられ、それが創造主の完成と充満の御業をもたらしめます。それゆえ、黙示録は、第一に、私たちに、創造主が語られたことは真実であり、創造主が約束されたことを創造主は必ず行なわれることを保証しています。第二に黙示録は、丁度、創世記が原初の真の歴史として確かなように真の歴史です。その登場人物は本当の人で、黙示録が預言している出来事は実際に起こります。こうして、創造主はご自身の御業を完成されます。



制作 ジェネシス ジャパン
311-3116 茨城県茨城町長岡 3652-171
tel 029-292-9621 fax 03-6862-8340